

作家と映画 William FaulknerとJames Ageeを中心に

著者	田中 秀人
著者別名	Hideto Tanaka
雑誌名	経済論集
巻	45
号	2
ページ	15-28
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011491

作家と映画 —William FaulknerとJames Ageeを中心に—

田 中 秀 人

序

作家と映画には切っても切れない縁がある。話題も多岐にわたる。¹⁾

先ず文学作品の映画化という大問題がある。²⁾ 次にプロの書き手ライターという立場から脚本家として招聘されるというケースがある。その体験をもとにストーリーを作り上げるという例も多い。³⁾ その書き手を主役に据える映画の中に、ニコラス・レイ (Nicholas Ray, 1911-1979) の『孤独な場所で』 (*In a Lonely Place*, 1950) [『アフリカの女王』 (*The African Queen*, 1951) のハンフリー・ボガート (Humphrey Bogart, 1899-1957) 主演] とジョエル・コーエン (Joel Coen, 1954-) の『バートン・フィンク』 (*Barton Fink*, 1991) がある。⁴⁾ それから作家生活の初期に映画批評家としての顔を持つ作家がいる。⁵⁾ その他、映画に関わった作家の例は枚挙にいとまがない。

そもそも観客の立場から映画に接したことのない人間は限りなく皆無に近く、作家が日常生活の一齣として映画を観る場面を描くことは、もはやクリシェになっていると言っても過言ではない。ウラジーミル・ナボコフ (Vladimir Nabokov, 1899-1977) の諸作 [*Camera Obscura* (1932) (*Laughter in the Dark*として1938年自ら英訳) や『ロリータ』 (*Lolita*, 1955)]⁶⁾ やウォーカー・パーシー (Walker Percy, 1916-1990) の『映画狂時代』 (*The Moviegoer*, 1961) など。比較的最近ではロバート・クーヴァー (Robert Coover, 1932-) の『ようこそ、映画館へ』 (*A Night at the Movies*, 1987) やスティーヴ・エリクソン (Steve Erickson, 1950-) の『ゼロヴィル』 (*Zeroville*, 2007)。フランスにもエリック・フォトリノ (Éric Fottorino, 1960-) の『光の子供』 (*Baisers de cinéma*, 2007) やオリヴィエ・プリオル (Olivier Pourriol, 1971-) の『美女と拳銃』 (*Une fille et un flingue*, 2016) がある。イタリアのチネチッタで映画を学んだアルゼンチンのマヌエル・プイグ (Manuel Puig, 1932-1990) の映画化され話題にもなった『蜘蛛女のキス』 (*Kiss of the Spider Woman*, 1976) [同名映画化作品、Hector Babenco監督、1985] もある。ポストモダニズムの旗手トマス・ピンチョン (Thomas Pynchon, 1937-) の『重力の虹』 (*Gravity's Rainbow*, 1973) など持ち出そうものなら、話題は果てしなく広がっていくだろう。この

ように映画と文学の関係は尽きない。二十世紀は映画の世紀だったのだから、⁷⁾ 当然と言えば当然の話ではあるけれど。

もし時代が違っていたら、また、もし詩人・小説家・映画批評家・脚本家・ジャーナリストと versatile (多才) なジェイムズ・エイジー (James Agee, 1909-1955) が酒を断ち、心臓発作に見舞われず生き長らえていたら、彼流のハリウッド小説が誕生していたかもしれないし、さらには脚本家にとどまらず映画監督への道へと進んでいたかもしれない (実際そうなるうとしていた) などという勝手な妄想もまんざら荒唐無稽な夢物語ではない。後代フランスのヌーヴォー・ロマンの作家たち、マルグリット・デュラス (Marguerite Duras, 1914-1996) やアラン・ロブ＝グリエ (Alain Robbe-Grillet, 1922-2008)、⁸⁾ 現役のアメリカ作家ポール・オースター (Paul Auster, 1947-) などは実際に映画監督業に進出したのだから。

ではなぜ、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) とジェイムズ・エイジーなのか？ 実はこの二人のアメリカ作家、映画と浅からぬ縁がある。キーワードはハリウッドと酒。それを解き明かすヒントは Tom Dardis が著した *Some Time in the Sun* と *The Thirsty Muse* という二冊の興味深い著書にある。⁹⁾ *Some Time in the Sun* (『ときにはハリウッドの陽を浴びて』) は F・スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 1896-1940)、フォークナー、ナサニエル・ウェスト (Nathanael West, 1903-1940)、オルダス・ハクスリー (Aldous Huxley, 1894-1963)、ジェイムズ・エイジーという五人の作家と ^{ハリ} ^ウ ^ッ ^ド との (それぞれ濃淡のある) 関わりを描いた好著で、わが国においても二度翻訳出版され、人口に膾炙している。今回はそのうちの二人、フォークナーとエイジーを取り上げるが、本稿はいわばその見取り図・青写真といったところである。

二冊目の *The Thirsty Muse* (『詩神は渴く』) は、主にフォークナー、フィッツジェラルド、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961)、ユージーン・オニール (Eugene O'Neill, 1888-1953) という四人の二十世紀のアメリカ作家 (三人の小説家と一人の劇作家、そのうち三人がノーベル文学賞受賞者) を取り上げて、文豪たちがアルコール依存症、つまりアルコール中毒だった事実、これらの作家と酒とのエピソードを綴ったゴシップまがいのノンフィクションである。(文学と酒は文学者の評伝でもない限り、通常の文学研究においては避けて通られることの多い問題である。テキスト自体とあまり関わりのない瑣末なエピソードであるからだ。) 「ノーベル文学賞を授与された生粋のアメリカ人七人のうちの五人はアルコール中毒であった。同じ苦しみを味わった二十世紀のアメリカの作家のリストは、極めて長いものになる。」¹⁰⁾ そしてその長いリストの最後に登場するのがジェイムズ・エイジーである。

この二冊の書物の主張を繋げれば、要するに二十世紀の (とりわけ世紀前半の) アメリカ作家の多くにはアルコール依存症が多かったということ、さらに、そのうちの何人かはハリウッドに招かれてシナリオ作家として映画の仕事に携わったという話である。

本稿は二十世紀アメリカを代表するノーベル賞作家ウィリアム・フォークナーとわが国では比較的知られることの少ないジェイムズ・エイジーを取り上げて、この二人の作家と映画との関わり、そしてアルコールとの関係を考察しようとするものである。二人を取り上げた理由は映画に対する対照的な姿勢にある。映画あるいはハリウッド嫌いのフォークナーvs.映画好き(映画狂と言ってもいいくらい)のエイジーという構図はダーティスの『ときにはハリウッドの陽を浴びて』にも容易に見て取れる。エイジーの章は「映画を愛した男」と題されている。二人のもう一つのちがいは、フォークナーが共同で書いたのに対し、映画を愛するエイジーが単独でシナリオを書いた点であろうか。『狩人の夜』(The Night of the Hunter, 1955)、スティーヴン・クレイン(Stephen Crane, 1871-1900)の短編小説を脚色したものなど。「花嫁、イエロースカイに来たる」(“The Bride Comes to Yellow Sky”)は映画化され、Face to Face(1952)の一部として公開された。ただし『アフリカの女王』は脚本家でもあるジョン・ヒューストン(John Huston, 1906-1987)監督と共同で書いたものである。

本来、文学研究、とりわけ二十世紀前半のいわゆるニュークリティシズム以後の文学研究は、作者の生涯などとは切り離して作品自体をテキストとして緻密に読み込むべきものとされてきた(作品自体の価値とは関わりがないからだ)が、今回は設定したテーマの都合上、かなりの程度の伝記的エピソードを交えざるを得ない。

フォークナーと映画

フォークナーについては今ここで改めて詳しく紹介する必要はないであろうが、簡単にまとめておこう(特にBlotnerの浩瀚なフォークナー伝、Bruce F. Kawinの著作、ダーティスの『ときにはハリウッドの陽を浴びて』などを参照しながら)。フォークナーは金銭的な理由から映画の都ハリウッドで脚本家として働かざるを得なかった。サイレント映画からトーキーへと移行中だった1930年当時、ハリウッドのスタジオは台本を書ける人材として作家を数多く起用し始めた。アメリカ南部ミシシッピの名門フォークナー家の家長として妻子のみならず、両親、弟一家など一族の面倒を見なければならなかったフォークナーは、1932年から1954年まで22年間(主な活動はワーナー・ブラザーズ・スタジオを無断で去る1945年まで)、糊口を凌ぐため故郷のミシシッピ州オクスフォード(生まれはニューオルバニーという町)とハリウッドとの間を断続的に行き来せざるを得なかった。ハリウッド滞在は「延べ4年以上の歳月」に及ぶ。¹¹⁾

プロの脚本家として成功した者以外は、ハリウッドに招かれた作家のほとんどが数カ月ないし数年でぼろきれのように使い古されて、空しく去っていくという結果に終わる——多くがハリウッドと酒に漬(さ)れる——なかで、断続的とはいえ長きにわたってハリウッドと交渉を持つことができたフォークナーにとってはハワード・ホークス(Howard Hawks, 1896-1977)という巨匠の存在が大きかった。ホークスの庇護あつてのフォークナーだった。コンビの代表作は『脱出』(To Have

and Have Not, 1944) と『三つ数えろ』(The Big Sleep, 1946) である。¹²⁾ (ともにハンフリー・ボガート、ローレン・バコール主演)

『響きと怒り』(The Sound and the Fury, 1929)、『死の床に横たわりて』(As I Lay Dying, 1930)、『サンクチュアリ』(Sanctuary, 1931)、『八月の光』(Light in August, 1932) といった前期のモダニズム小説の傑作群はすでに発表されていたが、作品の売れ行きは芳しくなく、経済的困窮はMalcolm Cowleyが編纂したThe Portable Faulkner出版(1946年)による再評価まで続いた。そして1949年のノーベル文学賞受賞などによって財政難からようやく解放された。

また、映画での仕事以外にも共通の趣味である飛行機の操縦や狩猟などを通して親密になったハワード・ホークス監督との友情をはじめとするハリウッド体験が、間接的に影響したとされる『^{パイロン}標識塔』(The Pylon, 1935)、『イエルサレムよ、我もし汝を忘れなば』(If I Forget Thee, Jerusalem, 1939) [The Wild Palmsとして出版]、ハリウッド滞在中の1944年に想を得てから完成までに九年余りを要した後期の野心作(フォークナー作品としては傑作とは言い難い)『寓話』(The Fable, 1954) など(いずれも非ヨクナパトーフアもの)はハリウッド体験の副産物と言えよう。そんなフォークナーが『アブサロム、アブサロム!』(Absalom, Absalom!, 1936)、『村』(The Hamlet, 1940)、『行け、モーセ』(Go Down, Moses, 1942)などの傑作をハリウッドと深く関わり合った時期に完成させ得たという事実は何を語っているだろうか?

ハリウッドで(あるいはミシシッピ州オクスフォードの^{ローアンオーク}自宅)で嫌々脚本を書いている間にもフォークナーは断続的に小説の執筆を続け、シナリオ執筆中も『アブサロム、アブサロム!』などの執筆に戻ることを願っていた。フォークナーにとって小説を書くことが生きることであったのだ。「ハリウッドは嫌いだ」というよく知られるフォークナーの言葉「私はここの気候が嫌いだ。人も、生活様式も嫌いだ。何事も起こらず、ある朝気がついたら、六十五歳になっているに違いない。」(“I don't like the climate, the people, their way of life. Nothing ever happens and then one morning you wake up and find that you are sixty-five.”)¹³⁾の真意は、「脚本書きなんて仕事は早いところ切り上げて、早く小説執筆の仕事に戻りたい」といったところではなかっただろうか。

一方、飲酒癖は10代後半から1962年7月6日の死まで続き、『アブサロム、アブサロム!』をはじめとする中期の作品の数々も、そしてまたハリウッドで書き飛ばされたシナリオの数々も言ってみれば酒の勢いを借りての作業だった。(朝一杯ひっかけてから筆を執るという生活だった。実際は一杯で止まるはずもなかった。)所詮、フォークナーにとって映画の脚本書きは金目当ての副業、極論すれば、彼の関心は小説を書くことにしかなかったのである。¹⁴⁾

映画がフォークナーに与えた影響(映画的技法)、フォークナーが映画および後代の(日本及び世界の)作家たちに与えた影響、映画化されたフォークナー作品、脚本家としてのフォークナーなどについてはすでに論じ尽くされた感があるので、ここでは詳しく触れない。

エイジーと映画（I）

一方、ジェームズ・エイジーについては、わが国においては未完の自伝的小説『家族のなかの死』（*A Death in the Family*, 1957）（死後出版されてピューリッツァー賞を受賞）が邦訳され、ダーデイスの『ときにはハリウッドの陽を浴びて』が一部の文学愛好家や映画ファンの間で話題になり、また川本三郎が『ハリウッドの神話学』で簡にして要を得た紹介をしている。が、正統的なアメリカ文学史や文学事典の扱いは群小作家^{マイナーライター}の域にとどまる。¹⁵⁾ ここで、数々の評伝^{ひもと}を繙いて、エイジーの経歴をまとめておこう。Episcopal（聖公会）の経営するSt. Andrew's Schoolの恩師で長年の友人でもあったFlye神父との生涯にわたる親密な交流の記録である『書簡集』（*Letters of James Agee to Father Flye*）の出版、二冊の自伝的小説『朝の見回り』（*The Morning Watch*, 1951）と『家族のなかの死』の執筆など、文学者としてはかなり自伝的要素の濃い作家であっただけに。この点では敬愛していた南部出身の作家、『天使よ故郷を見よ』（*Look Homeward, Angel*, 1929）、『時と河について』（*Of Time and the River*, 1935）、『汝、再び故郷に帰れず』（*You Can't Go Home Again*, 1940）のトマス・ウルフ（Thomas Wolfe, 1900-1938）の系譜に連なる作家と言えるだろうか。

1909年11月27日テネシー州ノックスビルに父Hugh James (Jay) Agee、母Laura Tyler Ageeの長男James Rufus Ageeとして生まれる。母方はもともと北部出身の、ノックスビルの裕福で敬虔なアングロ・カトリック教徒、一方、父ジェイのルーツはノックスビルの町の北方、アパラチア山脈一帯に住むhillbilly（ヒルビリー）と称される田舎者であった。都会と田舎、北部と南部、教養と野生というこの二項対立にエイジーは生涯引き裂かれることになる。6歳の時に迎えた父の死、母の再婚、フライ神父という親代わりの存在など作品に大きな影を落としている。（それがエイジー作品に顕著にみられる子供の視点へと繋がる。）エイジーの生涯自体が自己探求の旅だったのだ。¹⁶⁾

1934年には処女詩集『われに航海を許したまえ』（*Permit Me Voyage*, 1934）がThe Yale Younger Poets Seriesの一冊として出版される。ハーヴァード大学卒業後（大不況時）は雑誌*Fortune*でジャーナリストの道を歩み始める。1936年、アラバマ州の三軒^{シェアクロップパー フアホワイト}の小作農・貧農一家の姿を著名な写真家ウォーカー・エヴァンズ（Walker Evans, 1903-1975）のモノクロームの写真とともに描いたルポルタージュは、*Fortune*誌に出版を拒否されるが、1941年によくHoughton Mifflin社によって『いまこそ有名人を称えよう（わが民）』（*Let Us Now Praise Famous Men*, 1941）として日の目を見る。リアリスティックなルポルタージュであるのみならず、ルポライター/ジャーナリストとしてのエイジー自身の内なる声が聞こえてくる主観的な報告書^{リポート}といってよく、文学史上のユニークな実験となっている。そのユニークさから「ノンフィクションの『白鯨』」（“*Moby-Dick* in nonfiction”）などと呼ばれたりする。¹⁷⁾ 二十世紀アメリカ文学において異様な光芒を放つ特異な作品であることは間違いない。言葉と映像/写真のコラボレーションとしても先駆的な作品としてエイジーの代表作となっている。1929年以後の世界大恐慌、不況の1930年代、政治の季節でもあったこの激動の時代に

青春時代を過ごしたエイジーは、同時代の多くの知識人と同様、一時 Kommunismus に接近したが、その後幻滅して次第に離れていった。が、彼のリベラルな姿勢は生涯変わらなかった。¹⁸⁾

Time と進歩的な *The Nation* の映画評・映画欄担当者（後者は署名入り）としてアメリカにおける映画批評の草分けとなり、その後 *Life* に発表したジョン・ヒューストン論「監督不可能な監督」(“Undirectable Director,” 1950) でヒューストンと初顔合わせをした後、『アフリカの女王』の脚本家としてハリウッドに招かれることになる。¹⁹⁾ 『アフリカの女王』と『狩人の夜』という映画史に残る二本の名作（『狩人の夜』にはカルト的という形容がつく）の脚本を執筆し、二冊の自伝的な小説を書くことになるのだが、多年にわたる多量のアルコール摂取ですでに病に冒されており、1955年5月16日タクシーのなかで（45歳の若さで）心臓麻痺で亡くなる。奇しくも父の祥月命日であった。一言でいえば、ジェイムズ・エイジーは映画を真に愛した文人（a man of letters）だったので。

エイジーと映画（Ⅱ）

先ず、詩人 W・H・オーデン（W.H. Auden, 1907-1973）の言葉から始めよう。1942年から1945年にかけて Swarthmore College に滞在した詩人がエイジーの映画欄を評して、雑誌 *The Nation* の編集者に宛てた書簡である。のちに *Agee on Film* の序文として掲載され、有名になったものである。映画嫌いが待ち望む映画評であった。（以下に全文を掲載）

A LETTER TO THE EDITORS OF “THE NATION”

Dear Sirs: In the good old days before pseudo-science and feminism ruined her, it was considered rude to congratulate one's hostess on her meals, since praise would imply that they could have been bad, and by the same rule of courtesy it should be unnecessary to write grateful letters to the editors.

Astonishing excellence, however, is the exception, and James Agee's film column seems to this reader, and to many others he has spoken with, just that.

I do not care for movies very much and I rarely see them; further, I am suspicious of criticism as the literary genre which, more than any other, recruits epigones, pedants without insight, intellectuals without love. I am all the more surprised, therefore, to find myself not only reading Mr. Agee before I read anyone else in *The Nation* but also consciously looking forward all week to reading him again.

In my opinion, his column is the most remarkable regular event in American journalism today. What he says is of such profound interest, expressed with such extraordinary wit and felicity, and so transcends its ostensible—to me, rather unimportant—subject, that his articles belong in that very select class—the music critiques of Berlioz and Shaw are the only other members I know—of newspaper work which has permanent literary value.

One foresees the sad day, indeed, when Agee on Films [sic] will be the subject of a Ph.D. thesis.

W. H. Auden

Swarthmore, Pa., October 16, 1944²⁰⁾

『ネイション』編集者への手紙

拝啓 擬似科学や女性解放運動に台無しにされる前の古き良き時代、女主人を食事のことで褒めるなど失礼なことでした。贅辞は食事が不味くなっていたかもしれないということを意味していたからです。同じ礼儀上のルールから編集者に感謝状を書く必要もありません。

しかしながら、驚くべき腕前は例外と申すべきで、ジェームズ・エイジーの映画コラムこそ、読者たる私ならびに彼が語りかける他の多くの読者にとってまさにそういうものと思われま

す。私は映画があまり好きではありませんし、ほとんど見ません。さらに、私は文学ジャンルとしての批評というものに不信感を抱いています。それは他のなにものにも増して亜流、見識なき術学者、愛情なき知識人を起用します。それゆえ、なおさら私は『ネイション』誌を開いたら真っ先にエイジー氏を読み、のみならず毎週また読めることを心待ちにしてもいる自分に驚いているのです。

私見では、彼のコラムは今日のアメリカのジャーナリズムにおける最も注目すべき定期的な事件です。彼のことはきわめて興味深く、並はずれて機知に富み、巧みに表現されており、よって表向きの（私にとっては幾分重要ならざる）題材を超越し、その結果、彼の記事はあの選り抜きの部類に属することになるのです（私の知る限り、ベルリオーズとショーの音楽評がその一員と言えるでしょうか）。永遠なる文学的価値を有する新聞記事の類のあの選り抜きの部類に。

「エイジー・オン・フィルムズ」が博士論文のテーマとなるような、まこと、嘆かわしい日が訪れることになるでしょう。

W.H.オーデン

ペンシルベニア州スワスマア、1944年10月16日（引用者訳）

エイジーと映画との関係は先ず、子供時代の観客として始まる。子供の頃、チャップリン映画を父親と一緒に観に行ったエピソードが、死後に出版された自伝的な小説『家族のなかの死』の一場面として再現されている。²¹⁾

次にエイジーは映画批評家として登場し、その後の映画批評の基礎を築いた。今日アメリカでは、映画批評のパイオニア——映画批評を文学の領域にまで高めた第一人者——としてのエイジーの評価は揺るぎない。²²⁾

三番目が脚本家（シナリオライター）としての顔である。

アメリカでは現在エイジー再評価の機運が急速に高まっている。先ず、テネシー大学から刊行さ

れている「ジェイムズ・エイジー著作集」の充実ぶりが目覚ましい。²³⁾

また、アメリカ合衆国の古典文庫作りを目指す、つまりアメリカ文学の正典を確立しようとする試みであるThe Library of America^{シリーズ}叢書には、エイジーの代表作である正統的文学作品二編ほか収録の*James Agee: Let Us Now Praise Famous Men/ A Death in the Family/ Shorter Fiction* (Edited by Michael Sragow, 2005) と映画関係の文章が集められた(映画批評と*The African Queen*のシナリオ所収の)*James Agee: Film Writing and Selected Journalism* (Edited by Michael Sragow, 2005) の二巻が収められている。また、同シリーズの姉妹編とも言うべきAmerican Poets Projectには *James Agee: Selected Poems* (Edited by Andrew Hudgins, 2008) が入っている。

ちなみにThe Library of Americaには1960年代以降アメリカの映画批評界をリードしてきた才女ポーリン・ケイル (Pauline Kael, 1919-2001) の文章も*The Age of Movies: Selected Writings of Pauline Kael* (ed. Sanford Schwartz, 2011) として刊行されている。その他これまでにこのシリーズに収められた映画批評には*Farber on Film: The Complete Film Writings of Manny Farber*がある。すぐれた映画批評が正典、文学作品として認知されたということである。

エイジーが脚本の初稿を書いた『狩人の夜』は典型的なカルト映画として夙に有名であったが、いまや正真正銘の映画史上の古典の一つとなり、²⁴⁾ 数々の研究の対象となっている。これが唯一の監督作品となった名優チャールズ・ロートン (Charles Laughton, 1899-1962) がエイジーの第一稿を「徹底的に切り詰めた」²⁵⁾ 撮影台本 (Shooting Script) が、初稿ともどもテネシー版エイジー著作集に収められている。

Couchmanの*The Night of the Hunter: A Biography of a Film*という著書も、もともと著者がニューヨーク市立大学に提出した博士論文で、オーデンの「予見」を地で行く形となった。オーデンが予言した「エイジー・オン・フィルム」が博士論文のテーマとして論じられる「嘆かわしい」時代が現に到来したのである。クーチマンは今やその道の^{たいか}大家となり、エイジー著作集第4巻「*The African Queen*と*The Night of the Hunter*の脚本」の編集を担当している。テネシー大学出版局によるこの著作集出版によって、アメリカではいまや1960年代・80年代に次ぐエイジー再評価、映画批評と脚本を「文学」の次元にまで高めたこの先駆者の何度目かのリバイバルの様相を呈しており、ようやく本格的な研究が始まろうとしている。

日本でのエイジー(再)発見・(再)評価が待たれる所以である。

注

1) 文学と映画に関する文献をさまざまなテーマごとに紹介している貴重な労作が、Harris Ross, *Film as Literature, Literature as Film*である。前半のIntroductionが「映画と文学」への格好の入門になっている(1-57)。(資料としてはいささか古い。)

2) このところのadaptation(翻案)論の充実ぶりには目覚ましいものがある。原作者・監督・プロデューサー・脚本家・俳優・観客と立場が異なれば、映画は全く異なる様相を呈することになる。作家が自らシナリオを書いた古典的な例としては、ナボコフの『ロリータ』があるが、スタンリー・キューブリック(Stanley Kubrick, 1928-1999)が完成させた映画(1962年)は、ナボコフのシナリオとは別物になっている(ナボコフが書いた*Lolita: A Screenplay*はThe Library of Americaで入手可能)。また作家が別人の書いた作品の脚色に駆り出された例は、枚挙にいとまがない。古典的なものとして、フォークナーがヘミングウェイ原作の『持つと持たぬと』(*To Have and Have Not*, 1937) [映画化作品邦題『脱出』]やレイモンド・チャンドラー(Raymond Chandler, 1888-1959)作の『大いなる眠り』(*The Big Sleep*, 1939) [映画化作品邦題『三つ数えろ』]の「共同」脚本家としてクレジットされ、SF作家のレイ・ブラッドベリ(Ray Bradbury, 1920-2012)がハーマン・メルヴィル(Herman Melville, 1819-1891)の『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)のシナリオをジョン・ヒューストン監督と共同で書いた(1956年)。

ヒューストンは最初『白鯨』のシナリオ執筆をエイジーに依頼した(“Chronology,” *James Agee: Film Writing and Selected Journalism*, 715)が、自らの死を予感した時、エイジーは『白鯨』よりも『狩人の夜』を選んだ。そこにエイジーという作家の資質が伺われる。『家族のなかの死』に『白鯨』よりも『狩人の夜』との親近性があるということだ。『アラバマ物語』(*To Kill a Mockingbird*, 1960)にも通じる子供の視点から見られたアメリカ南部の物語である。

ジェイムズ・M・ケイン(James M. Cain, 1892-1977)原作の『殺人保険』(*Double Indemnity*, 1943) [映画化作品邦題『深夜の告白』、1944]を脚色したのはレイモンド・チャンドラーだし、ヘンリー・ジェイムズ(Henry James, 1843-1916)の『ねじの回転』(*The Turn of the Screw*, 1898)のアダプテーションである*The Innocents*(1961) [映画化作品邦題『回転』(ジャック・クレイトン監督)]はトルーマン・カポーティ(Truman Capote, 1924-1984)が担当した。またノーベル文学賞を受賞した劇作家ハロルド・ピントー(Harold Pinter, 1930-2008)は、ジョン・ファウルズ(John Fowles, 1926-2005)の『フランス軍中尉の女』(*The French Lieutenant's Woman*, 1969)を見事に映画化した(カレル・ライス[Karel Reisz]監督, 1981)。『フランス軍中尉の女』の原作・脚本・映画の関係については、Seymour Chatman, *Coming to Terms: The Rhetoric of Narrative in Fiction and Film*, 161-83を参照。2019年のノーベル文学賞を授与されたオーストリアの作家ペーター・ハントケ(Peter Handke, 1942-)も『ベルリン・天使の詩』(*Der Himmel über Berlin [Wings of Desire]*, 1987)の脚本をウィム・ヴェンダース(Wim Wenders, 1945-)監督とともに書いた。

文学者の書いたシナリオは、たとえ完成した映画とかけ離れていても、その文学的価値から出版されることが多い。映画とは別物として読まれるのである。作品としての映画は最終的には監督のものであり、脚本家は映画のいわば設計図を提供しているわけである。だから作家性の強い(あるいは脚本家から出発した)監督/映画作家は自ら脚本を執筆したり、脚本家と共同でシナリオを執筆することが多いのである。

3) シナリオ作家としての経験からハリウッドあるいは映画撮影をめぐるストーリーを書いた小説家も多い。フィッツジェラルドの『ラスト・タイクーン』(*The Last Tycoon*, 1941)、ナサニエル・ウェストの『イナゴの日』(*The Day of the Locust*, 1939)など。フォークナーにもハリウッドを舞台にした唯一の短編「黄金の地」(“Golden Land,” 1935)がある。ダーディスの『ときにはハリウッドの陽を浴びて』に詳しい。メタシネマ

- はフェデリコ・フェリーニ (Federico Fellini, 1920-1993) の『8½』 (*Otto e mezzo*, 1963) をはじめ、数知れない。
- 4) 『バートン・フィンク』にはフォークナーと思しき作家が登場する。ほかにピリー・ワイルダー (Billy Wilder, 1906-2002) の『サンセット大通り』 (*Sunset Boulevard*, 1950)、ジャン＝リュック・ゴダール (Jean-Luc Godard, 1930-) の『軽蔑』 (*Le Mépris*, 1963) など。
 - 5) 古典的な例として、イギリスにグレアム・グリーン (Graham Greene, 1904-1991) がおり、アメリカにはジェイムズ・エイジーがいる。最近ではステイーヴ・エリクソンがいる。魔術的リアリズムで知られるコロンビアのノーベル文学賞受賞者 (『百年の孤独』) のガブリエル・ガルシア＝マルケス (Gabriel Garcia Márquez, 1928-2014) にも映画評論家、シナリオ作家としての経歴がある。
 - 6) ナボコフと映画に関しては、Appelの*Nabokov's Dark Cinema*という先駆的な研究がある。
 - 7) エイジーは17歳の時に友人のDwight MacDonaldに宛てた手紙に書いた。映画こそ “the great new art form of [the] century” (“[20] 世紀の偉大な新しい芸術形式”) だ、と。Dardis, *Some Time in the Sun*, 196に引用。アーノルド・ハウザー『芸術と文学の社会史』(高橋義孝訳、平凡社、1968年)の最終章は「映画の時代」と題されている。
 - 8) 二人はそれぞれ最も文学的な映画作家の一人であるアラン・レネ [Alain Resnais (1922-2014)] 監督の『二十四時間の情事』 (*Hiroshima mon amour*, 1959)、『去年マリエンバートで』 (*L'Année dernière à Marienbad*, 1961) のシナリオを執筆している。
 - 9) Dardisにはその他にKeaton: *The Man Who Wouldn't Lie Down* (邦訳『バスター・キートン』、飯村隆彦訳、リプロポート、1987年)、Harold Lloyd: *The Man on the Clock*という著作がある。
 - 10) Dardis, *The Thirsty Muse*, 3. 文豪たちの酒との凄絶な闘いを描いていて、圧倒的である。アルコール依存症に陥った作家の多くは40代ぐらいまでに才能を枯渇させている。ダーデイスの原著は1989年の出版であり、その後アメリカ合衆国はIsaac Singer, Toni Morrison, Bob Dylanとノーベル文学賞受賞者を輩出している。
 - 11) Blotner, “Faulkner in Hollywood” in Robinson, *Man and the Movies*, 262; Dardis, *Some Time in the Sun*, 73.
 - 12) エイジーの映画*To Have and Have Not*評の*The Nation*掲載分 (November 4, 1944) はJames Agee: *Film Writing and Selected Journalism*, 144-45. *Time*掲載分 (October 23, 1944) はIbid., 404-7. *The Big Sleep*評の*The Nation* 掲載分 (August 31, 1946) はIbid., 250-51. *Time*掲載分 (August 26, 1946) はIbid., 502-3. また、エイジーのフォークナー『村』 (*The Hamlet*, 1940) のブックレビュー (*Time* [April 1, 1940]) はIbid., 677-79. これらがフォークナーとエイジーの接点と言えるだろうか。
 - 13) Dardis, *Some Time in the Sun*, 108. George Sidney, *Faulkner in Hollywood: A Study of His Career as a Scenarist* (Albuquerque: University of New Mexico, 1959), 50からの孫引き。
 - 14) それゆえの晩年の書けなくなっからの痛々しさ。(フォークナーのアルコール依存症は年を追うごとに深刻化していった。)
 - 15) たとえば*Columbia Literary History of the United States* (ed. Emory Elliott) 並びに『集英社世界文学大事典』。通常の意味の文学作品の絶対数が少ないこと、あるいは*The Great Gatsby*のような決定打がないことが災いしているのか? 『コロンビア米文学史』は*Let Us Now Praise Famous Men*だけを扱っている。テネシー大学による著作集の刊行は、エイジーの映画関係の文書やジャーナリスティックな書きものが第一級の文学と呼ぶに値すると評価された証である。
 - 16) 研究書、評伝の類のタイトルを見れば一目瞭然である。Tell Me Who I Amとか*The Restless Journey of James Agee*とか。
 - 17) David Madden, “The Test of a First-Rate Intelligence: Agee and the Cruel Radiance of What Is,” in Michael A. Lofaro,

- ed. *James Agee: Reconsiderations*, 35; Bordwell, *The Rhapsodes*, 63-4.
- 18) たとえばMoreau, *The Restless Journey of James Agee*, 111-12, 132-33, 148-49, 173参照。
- 19) Huston, *An Open Book*, 188-90. エイジーが途中で心臓発作に襲われたため、ヒューストンはピーター・ヴィアテル (Peter Viertel) とともに脚本を仕上げた (クレジットにはヴィアテルの名前はない)。『アフリカの女王』撮影時のヒューストン監督の姿は、ヴィアテル原作・共同脚本、クリント・イーストウッド (Clint Eastwood, 1930-) 製作・監督・主演の『ホワイトハンター ブラックハート』 (*White Hunter; Black Heart*, 1990) に描かれている。
- 20) *James Agee: Film Writing and Selected Journalism*, 3.
- 21) ジェイムズ・エイジーの最も有名なエッセイはサイレント・コメディ論の“Comedy’s Greatest Era”である。
James Agee: Film Writing and Selected Journalism, 9-33.
- 22) David Bordwell, *The Rhapsodes: How 1940s Critics Changed American Film Culture*, 59-81; Edward Murray, *Nine American Film Critics*, 5-23参照。
- 23) 目下、*The Works of James Agee*として
Vol. 1. *A Death in the Family: A Restoration of the Author’s Text*.
Vol. 2. *Complete Journalism: Articles, Book Reviews, and Manuscripts*.
Vol. 3. *Let Us Now Praise Famous Men: Three Tenant Families: An Annotated Edition of the James Agee-Walker Evans Classic, with Supplementary Manuscripts*.
Vol.4. *The African Queen and The Night of the Hunter: First and Final Screenplays*.
Vol. 5. *Complete Film Criticism: Reviews, Essays, and Manuscripts*. と続いている。
- 24) 英国映画協会 (British Film Institute、通称BFI) が1952年以来10年毎に行っている映画史上のオールタイムベスト100 (*Sight and Sound*誌上で公開)。『狩人の夜』は2012年に映画監督部門で第26位に、批評家部門では第63位に選出されている。*TimeOut Film Guide*の同種の投票では第11位にランクされている。(これは過大評価か？誰が選ぶかである。) *TimeOut Film Guide*, 4th edition. Edited by John Pym (London: Penguin Books, 1995), 985-86.
- 一方、映画誕生100周年に米国映画協会 (American Film Institute、通称AFI) が行ったAmerica’s 100 Greatest Movies (1998) では『アフリカの女王』が第17位に、2007年には第65位にランク入りしている。撮影は『天国への階段』 (*A Matter of Life and Death*, 1946)、『赤い靴』 (*The Red Shoes*, 1948) のジャック・カーディフ (Jack Cardiff, 1914-2009)。一方、『狩人の夜』の撮影はオーソン・ウェルズ (Orson Welles, 1915-1985) の『偉大なるアンバーソン家の人々』 (*The Magnificent Ambersons*, 1942) の撮影監督であるスタンリー・コルテス (Stanley Cortez, 1908-1997) が担当した。
- エイジーが脚本を書いた『アフリカの女王』は最初 (『狩人の夜』の) チャールズ・ロートン、エルザ・ランチェスター (ロートン夫人) 主演で映画化される予定だったという因縁めいた話が、ジョン・ヒューストン、*An Open Book*に出ている (187)。
- フォークナーとホークス、エイジーとヒューストン、ハンフリー・ボガート (とボガート夫人ことローレン・バコール) とキャサリン・ヘプバーン、そしてチャールズ・ロートン。人の輪がいろいろなところで繋がっていて、興味が尽きない。狭いハリウッドの業界内での話だから当然と言えば当然の話ではある。
- 25) Jeffrey Couchman, *The Night of the Hunter: A Biography of a Film*, 81; James Agee, *The African Queen and The Night of the Hunter: First and Final Screenplays*, xix, 473- 90.

Selected Bibliography

- Agee, James. *Agee on Film. Vol.1, Reviews and Comments*. New York: Putnam, 1983 [1958].
- . *Agee on Film. Vol. 2, Five Screen Plays*. New York: Putnam. 1983 [1958].
- . *A Death in the Family: A Restoration of the Author's Text*. Edited by Michael A. Lofaro. Vol. 1, The Works of James Agee. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2007.
- . *The African Queen and The Night of the Hunter: First and Final Screenplays*. Edited by Jeffrey Couchman. Vol. 4, The Works of James Agee. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2017.
- . *Complete Film Criticism: Reviews, Essays, and Manuscripts*. Edited by Charles Maland. Vol. 5, The Works of James Agee. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2017.
- . *James Agee: Film Writing and Selected Journalism*. Edited by Michael Sragow. New York: Literary Classics of the United States, 2005.
- . *James Agee: Let Us Now Praise Famous Men/ A Death in the Family/ Shorter Fiction*. New York: Literary Classics of the United States, 2005.
- . *James Agee: Selected Poems*. Edited by Andrew Hudgins. New York: Literary Classics of the United States, 2008.
- . *Let Us Now Praise Famous Men*. Boston: Houghton Mifflin, 1969 [1941].
- . *Let Us Now Praise Famous Men: An Annotated Edition of the James Agee-Walker Evans Classic, with Supplementary Manuscripts*. Edited by Hugh Davis. Vol. 3, The Works of James Agee. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2015.
- . *Letters of James Agee to Father Flye*. New York: George Braziller, 1962.
- . *The Morning Watch*. London: Peter Owen, 1975 [1951].
- Appel, Alfred, Jr. *Nabokov's Dark Cinema*. New York: Oxford University Press, 1974.
- Barson, Alfred T. *A Way of Seeing: A Critical Study of James Agee*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1972.
- Bergreen, Laurence. *James Agee: A Life*. New York: Dutton, 1984.
- Blotner, Joseph. "Faulkner in Hollywood," in Robinson, *Man and the Movies*, 261-303.
- . *Faulkner: A Biography*. 2 vols. New York: Random House, 1974.
- Bordwell, David. *The Rhapsodes: How 1940s Critics Changed American Film Culture*. Chicago: The University of Chicago Press, 2016.
- Chatman, Seymour. *Coming to Terms: The Rhetoric of Narrative in Fiction and Film*. Ithaca: Cornell University Press, 1990.
- Couchman, Jeffrey. *The Night of the Hunter: A Biography of a Film*. Evanston: Northwestern University Press, 2009.
- Dardis, Tom. *Some Time in the Sun: The Hollywood Years of Fitzgerald, Faulkner, Nathanael West, Aldous Huxley, and James Agee*. New York: Scribner's, 1976.
- . *The Thirsty Muse: Alcohol and the American Writer*. New York: Ticknor & Fields, 1989.
- Doty, Mark A. *Tell Me Who I Am: James Agee's Search for Selfhood*. Baton Rouge: Louisiana State University, 1981.
- Faulkner, William. *Faulkner, Novels 1936-1940*. New York: Literary Classics of the United States, 1990.
- . *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Random House, 1950.
- . *The Big Sleep: A Screenplay*. In *Film Scripts One*, eds. George P. Garret, O.B. Hardison, Jr., Jane R. Gelfman. New York: Appleton-Century-Crofts, 1971.
- . *To Have and Have Not: A Screenplay*. ed. Bruce F. Kawin. Madison: The University of Wisconsin Press, 1980.
- Forester, Cecil Scott. *The African Queen*. London: Macmillan, 2017 [1935].

- Greene, Graham. *The Pleasure Dome: The Collected Film Criticism 1935-40*. Ed. John Russell Taylor. Oxford: Oxford University Press, 1980 [1972].
- . *Mornings in the Dark: The Graham Greene Film Reader*, ed. David Parkinson. London: Penguin Books, 1995 [1993].
- Grubb, Davis. *The Night of the Hunter*. New York: Vintage, 2015 [1953].
- Hamilton, Ian. *Writers in Hollywood 1915-1951*. New York: Harper & Row, 1990.
- Harrington, Evans, and Ann J. Abadie, eds. *Faulkner, Modernism, and Film*. Jackson: University Press of Mississippi, 1979.
- Hepburn, Katharine. *The Making of The African Queen or How I went to Africa with Bogart, Bacall and Huston and almost lost my mind*. New York: Knopf, 1987.
- Huston, John. *An Open Book*. Boston: Da Capo Press, 1994 [1980].
- Jones, Preston Neal. *Heaven and Hell to Play With: The Filming of The Night of the Hunter*. New York: Limelight, 2002.
- Kawin, Bruce F. *Faulkner and Film*. New York: Frederick Ungar, 1977.
- Kramer, Victor A. *James Agee*. Boston: Twayne, 1975.
- Lofaro, Michael A. *James Agee: Reconsiderations*. Knoxville: The University of Tennessee Press, 1992.
- . *Agee at 100: Centennial Essays on the Works of James Agee*. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2012.
- Lurie, Peter. *Vision's Immanence: Faulkner, Film, and the Popular Imagination*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2004.
- Lurie, Peter, and Ann J. Abadie, eds. *Faulkner and Film*. Jackson: University Press of Mississippi, 2014.
- Magny, Claude-Edmonde. *The Age of the American Novel: The Film Aesthetic of Fiction between the Two Wars*. Trans. Eleanor Hochman. New York: Frederick Ungar, 1972.
- McBride, Joseph. *Hawks on Hawks*. Lexington: The University Press of Kentucky, 2013 [1982].
- Moreau, Geneviève. *The Restless Journey of James Agee*. Trans. Miriam Kleiger and Morty Schiff. New York: Morrow, 1977.
- Murray, Edward. *The Cinematic Imagination: Writers and the Motion Pictures*. New York: Frederick Ungar, 1972.
- . *Nine American Film Critics*. New York: Frederick Ungar, 1975.
- Nabokov, Vladimir. *Nabokov, Novels 1955-1962*. New York: Literary Classics of the United States, 1996.
- Phillips, Gene D. *Fiction, Film, and Faulkner: The Art of Adaptation*. Knoxville: The University of Tennessee Press, 1988.
- Pinter, Harold. *The French Lieutenant's Woman: A Screenplay*. Boston: Little, Brown and Company, 1981.
- Robinson, W.R. ed. *Man and the Movies*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1967.
- Ross, Harris. *Film as Literature, Literature as Film: An Introduction to and Bibliography of Film's Relationship to Literature*. New York: Greenwood Press, 1987.
- Sinyard, Neil. *Filming Literature: The Art of Screen Adaptation*. London: Routledge, 2013 [1986].
- Solomon, Stefan. *William Faulkner in Hollywood: Screenwriting for the Studios*. Athens: The University of Georgia Press, 2017.
- Trotter, David. *Cinema and Modernism*. Oxford: Blackwell, 2007.
- Ward, J.A. *American Silences: The Realism of James Agee, Walker Evans, and Edward Hopper*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1985.

[邦語文献]

ジェイムズ・エイジー『家族のなかの死』、金関寿夫訳、集英社、1978年

デイヴィス・グラップ『狩人の夜』、宮脇祐子訳、創元推理文庫、2002年

トム・ダーディス『ときにはハリウッドの陽を浴びて—作家たちのハリウッドでの日々』、岩本憲児・宮本峻・森田典正・鈴木順子訳、研究社出版、1996年

トム・ダーディス『詩神は渴く—アルコールとアメリカ文学』、関弘・秋田忠昭訳、トパーズプレス、1994年

ジョン・ヒューストン『王になろうとした男—ジョン・ヒューストン』、宮本高晴訳、清流出版、2006年

ウィリアム・フォークナー、ジュールズ・ファースマン脚本『脱出』、清水俊二監修、新書館、1984年

セシル・スコット・フォレスター『アフリカの女王』、佐和誠訳、ハヤカワ文庫、1979年

キャサリン・ヘプバーン『「アフリカの女王」とわたし』、芝山幹郎訳、文春文庫、1993年

クロード＝エドモンド・マニー『アメリカ小説時代—小説と映画』、三輪秀彦訳、フィルムアート社、1983年

川本三郎『ハリウッドの神話学』、中公文庫、1987年

『kotobaコトバ』No.23「映画と本の意外な関係」、集英社、2016年春号

『フォークナー第8号 フォークナーと大衆文化』、松柏社、2006年4月

『フォークナー第11号 フォークナーと映画』、松柏社、2009年4月